



多様性について考える

校長 中村 誠

保護者の皆様におかれましては、学校評価アンケートに御協力いただき、心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。アンケート結果の分析と考察については「学校だより特別号」として、配布をさせていただきます。是非ご覧ください。

さて、今回の学校評価に「子どもたちは進んであいさつをしている」という質問項目がありました。この質問に対し、ある保護者から「挨拶したいけれど声が出せない。努力はしているのに、選択肢にそれが表れないのがつらい」という率直なご意見をいただきました。私は、この記述を読んで胸が熱くなりました。なぜなら、この言葉は「声を出すこと＝挨拶」ではない現実、そして「見えにくい努力」を見てほしいという願いを、真っ直ぐに私たちに届けてくれたからです。ご意見を寄せてくださった方に、まず心からの感謝をお伝えします。

私たちは、つい「できている/できていない」という二分法で物事を捉えがちです。しかし、子どもたちの日々はそのどちらにも簡単に割り切れません。体調、感情、感覚の特性、家庭や地域での文化、言語背景、障害の有無…挨拶ひとつをとっても、そこにはさまざまな前提と工夫が存在します。「元気な声で挨拶する」ことは素晴らしい。でも、それだけを正解とする別の形で誠実に他者を尊重しようとする試みが、見えないものになってしまいます。

たとえば、目を見て会釈する、胸の前で手を軽く合わせる、手話や指文字を使う、カードや端末で気持ちを示す、視線で反応する-これらはすべて立派なコミュニケーションであり「あなたに関心があります」「ここに一緒にいます」というメッセージです。声が出せない日がある人も、初めての場面で緊張する人も、朝は感覚が過敏で音を発しづらい人もいます。大切なのは、「どう挨拶するか」よりも、「互いを大切に思う心が伝わるか」です。

今回のアンケート設問は、私たちに「問い合わせの立て方」を見直すきっかけをくれました。問い合わせは、子どもたちの世界の見え方を形づくります。「できたか/できないか」ではなく、「どのように試みているか」「どんなときにうまくいくか」「どんな支えがあると助かるか」などの問い合わせすることで、努力とプロセス、そして多様な手段を可視化できます。

多様性とは、違いを「あるがまま」に置いておくことではありません。違いの背景にあるものをしっかりとみて、ルールそのものを見直し、誰もが参加できるように場を作り直すことであると考えます。そこでは、互いを尊重する態度が価値を持ちます。挨拶は「関係の扉」を開く営みです。その扉を、声だけでなく、目線でも、手でも、文字でも、デジタルでも開けられるようにしていきたい—それが、今回のご意見から受け取った私たちの宿題です。

これからも、子どもたち一人ひとりの違いをしっかりと受け止め、その多様な方法を教育の力に変えていきます。学校は学びの共同体です。学校・保護者・地域が一体となって、互いの違いが力になる日常をつくっていけるよう日々精進していきます。

今後とも、御理解と御協力のほどお願い申し上げます。

